Creative Workの為の領域規定と創作方法

葵　妖子

1. 緒　言

複数・異分野の作家が同一場・同一水準で行う相互作用を基軸にして統一される総合芸術を“Origination”と仮称し，現在その2回目の実験を継続中である。

今回の実験の特徴としては，第1に現象場*に加えて思考場を想定し，これを重視したことである。それは我々が演者のレベルでなく作家のレベルに立った相互作用を目ざしていることと同時に，現象の方向性を問題にし，より芸術性の高い相互作用を求めていることを目標としたからである。第2に思考場に於いては表現手段として同一記号・言語を採用していること等である。

2. 思考領域の規定化

第1回のCreative Workは各自指標に基づいてとりあえず作品化の形態をとった。その理由は芸術現象に意味と形式（または形式のみ）が存在し，指標への必然が明示されていなければならないからである。

先づ，これ等の作品は何を起点にどのような過程を経て現象化され得たのか，この逆の場合も含めてこれを同一の表現記号である言語に置き換えると，これによって各自の創造上の思考領域の起点がより顕著に浮び上がるので，これを中軸と定める。

次いで，作家間の作品化への思考過程を相互に理解することにより，自然な形で相互作用を誘発させ各自の思考領域を拡大させて行く。この過程では絶えず指標を対応させ拡大化への均衡を計った。尚，相互作用の引き金として第1に指標をテーマとした討論を行った。

最後に，拡大された過程では当然思考上オーバーラップした部分も生ずるので，その共有部分を含め各自取拾選択をしてそれ等を包括したものを外核と定めた。

以上によって思考領域の規定化の第1回は終了とし，これを言語によって表にまとめることによって我々が再び現象場での相互作用を行う為の目安となる思考場が形成されたのである。今後の作業ではこの表をさらに検討しながら，台本に代るもの（相互作用する上での制御装置）として完成させる予定である。

3. Originationのための創作方法

先述したごとく，1回目のCreative Workに於いては一先づ作品化の形態をとったのであるが，この方法は以下の点で問題があることが判明した。

(1) 作品化する上では各フレーズに分解したとき，たとえば個の主張する部分以外に，各フレーズの連結部分とか効果のための部分等を挿入して作らざるを得ないのであるが，これ等の部分で相互作用を行うと誤った方向に全体が流がされる。

(2) Originationの全作業過程では統一のための制御と創造のための自由度が必要であるが，個々のCreative Workの段階で作品化の形態をとることはそれだけですでにある制御を課しているために，著しく創造上の自由度を低下せしめる。

(3) 相互作用を開始させてから個々のCreative Workによる作品化は，ある意味で個の喪失または個の閉系化への危険がある。

以上のような考察を踏まえると，第2回目のCreative Workに於ける創作方法としては，上述の(1)に示す余分（Redundancy）を削除して，個々の思考要素（意味的または形式的要素）をフレーズ（象徴的ブロック）に解体したまま，序列等も無視した分散状態で作る必要がある。削除したRedundancyは後の作業（統一作業）の段階で検討する予定であるためここでは触れないものの，以上の創作方法を我々はＣＩＯ（Creation with Interaction in Origination）方式と名付けている。

4. 結　言

“Origination”に於ける作業中に，我々は自己作業である創造以外の部分で厳密性を求めることはほとんど困難である。したがってこの報告書に於いても同じような点で非科学的な形式になったことは反省している。

思考領域に立ち入らねばならぬ理由は既に述べたとおりであるが，情報伝達と思考領域の規定などの表現には言語に依存しなければならない。しかし言語表現は我々の有する記号に比較してより明確であるものの，捨象した部分も多いので使用にあたってはこの点を十分に考慮しなければならない。

我々はこの言語記号を決して絶対視するものでは無く，故にすべて“おおよそ”と云った大まかな方法で包括し，徐々にその領域を狭ばめるとともに密度を高め明確さを求めて行く計画である。

---

* ここでは，各作家の有する記号によって表現されたものを現象・また創作に於ける現象化以前の心理過程を思考と定義している。